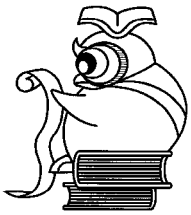
Title	図書館からはじまる世界との相互包摂
Author(s)	牛津, 信忠
Citation	ぱぴるす 56 号(2013 年春), 2013, 1p
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4369
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ぱぴるす
聖学院大学総合図書館報

第56号（2013年春）
祝卒業・
新入生歓迎号



図書館からはじまる 世界との相互包摂

牛津　信忠

これまで多くの図書館を訪れた。それぞれが特色ある「知」の宝庫としての相貌を持ち、私たちの心に様々な形で訴えかけてくれる。

そのなかでもケンブリッジ大学のULｰ（University Library）について語ってみたい。

この大学図書館は、長い混乱と再組織化の旅路を経て今日に至るが、現在のULは古風な様式を残したまま、Newtonという名の検索機の完備のもとで、広範な８百万以上の図書を開架式で閲覧できる。（貴重な書籍や人気の高い書籍は閉架式閲覧である。）また大学の各学部や各カレッジ（学寮）の100以上の図書館の知的資源ともNewtonを通じて比較的自由に接することができ、その広がりは途方もなく大きい。

ところでULの開架式書庫では、目的の図書に辿り着くまでにはかなりの慣れがいる。迷路と暗がり、さらに特有な臭いに打ち勝たねばならない。また何十列もの長い書棚毎のタイマー付の電燈スウィッチをつけ、それが切れる数分間で本に辿り着かねばならない。その棚に本があれば幸いで、最近では、本があふれ、置き場の変更や棚脇のサイドデスクに仮置がざらである。やっと本に辿り着き、一階のリーディングルームで読書に励むことになる。しかし５、６階で本に辿り着くと、長い距離を戻るのは時間が惜しく、書棚脇のサイドデスクでページをめくることが多い。光は細くかなりの暗がりで本を読んでいることに気付く。このほの暗さにもやがて慣れ、落ち着いた雰囲気さえ感じるようになる。時間が来て、５冊まで三日間キープできるカードを挟み込み学寮へと戻る。

この図書館に日々接していると、ほの暗い空間に自らが溶け込むような感覚が訪れてくる。そうして自己を枠づけていた知の障壁が薄れ自己の解放を感じる。同時にここに集い学びの時を持った人々との本を通じての交流を感じる。知の共同に踏み入れたような嬉しさを率直に受け入れている自分がいる。その感覚は図書館に深く踏み入れば踏み入れるほど広がりを持ち、世界の知との相互包摂という感覚がさほど大げさなものではなく、確実にそこにあると思えるのである。

図書館とはそのような世界との相互包摂への入り口であるということを、このULは感じさせてくれた。それ以来、どのような図書館でも、図書館に足を踏み入れ、その特性とそこに備えられた書籍と親しみ、語られている言葉との交流を始めれば、そのような感覚が訪れてくるようになった。私にとってのULはそのことを教えてくれた貴重な場となった。

（人間福祉学部長　人間福祉学部教授）

著書紹介

社会福祉における場の究明
―共感的共同からトポスへ至る現象学的考察

牛津信忠（著）　丸善出版 2012年12月

本書は、現象学に基づく福祉哲学の領域を切り開く試みである。特に科学によっては捉え難い「人格」をその軸芯とすることによって、真の福祉への道が、相互包摂情況という特性を持つトポス（場）へと続くことを解明しようとする。

※この本は本学初の電子書籍として導入されました。OPACから接続してご利用ください。